

1. 開園直後の特別展示及び企画展

開園時に行われた記念特別展が『東京芸術大学学生による“小さくても大きな虫たち”』（平成17年8月1日～9月4日）であった。巨大な昆虫ダンボールオブジェを多数展示したもので、大空間に合った画期的な展示であった。そして第1回企画展『里地・里山展』（平成17年10月4日～12月4日）までが、開園前から準備されたものであり、第1回企画展の会期終了が近づく中、このフロアで展示を続けるという現実の厳しさと、業務的なウェイトの大きさを実感することになった。



図3 開園記念特別展

『東京芸術大学学生による“小さくても大きな虫たち”』

第2回企画展を急遽立案し、温室の舞台となった西表島をテーマとした、『いりおもての自然とチョウ』（平成17年12月10日～平成18年4月16日）を開催してフロアの継続的な展示としてしのいだが、計画性が乏しい企画展示に反省しつつ、翌年に向けた計画立案を始めた。

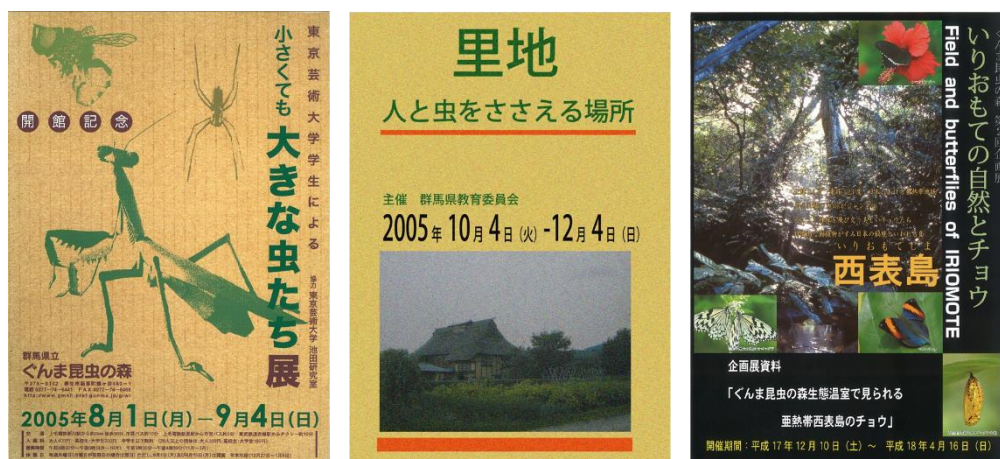


図4 開園した平成17年度中に開催された特別展および企画展のポスター

2. 展示ローテーションの模索

まず、平成 18 年度の繁忙期に照準を合わせた第 3 回企画展のテーマを『かくれる虫 さがしだす鳥』（平成 18 年 4 月 29 日～9 月 3 日）とし、それに続いて、秋には鳴く虫などの季節感が強く、定例的に実施が可能な特別展示を「季節展」という位置づけで『秋の野山の昆虫展』（平成）18 年 9 月 9 日～10 月 29 日）を実施する案を立てた。



図 5 第 3 回企画展ポスター及び季節展『秋の野山の昆虫展』会場の様子

そして、その後につなぐ特別展示として、教職員スタッフから発案されたのが『第 1 回ぐんま昆虫の森 昆虫画作品展』（その後、「虫の絵作品展」へ名称を変更）である。県内小学校の夏休みの宿題として虫の絵の提出を依頼し、各小学校内で選抜した作品を集めた。企画展フロアをメイン会場とし、館内の壁面や空間全体を使って作品を掲示する特別展示となり、絵が掲示された小学生には招待券を配布し、入園者増にも結びつく効果を生み出した。

年が明けた冬の展示として、まず、季節展『昆虫たちの冬越し展』を計画したが、広い企画展フロアを埋めるだけの材料がそろわず、並行して一般公募によるフォトコンテストをメインの展示として実施することになった。



図 6 『虫の絵作品展』及び『フォトコンテスト』の会場の様子

※『昆虫たちの冬越し展』は第 1 回開催以降は会場を 2 階フロアに移動

3. 「テーマ展」の開催と「季節展」への移行

その後も、年間を通した展示の流れの検討を続け、企画展の開催期間が長いことと、夏に照準を合わせるべきとの考えから、春らしい企画展示の必要性が生じた。そこで「テーマ展」という位置づけの特別展『ミツバチのふしぎ展』（平成 19 年 3 月 3 日～4 月 22 日）の開催に至った。その後、テーマ展は『アゲハのふしぎ展』（平成 20 年 3 月 1 日～5 月 11 日）『花と昆虫のふしぎな関係』（平成 21 年 3 月 7 日～5 月 10 日）を連続して開催したが、製作予算の減少と、春というテーマだけで、毎年新しい特別展示の継続が難しくなってきた。そこで、過去の製作データを統合しつつ改変し、「ミツバチ」「春のチョウ」「テントウムシ」という三つのテーマで『春めく里山の昆虫展』（平成 22 年 3 月 6 日～5 月 9 日）とし、春に行う「季節展」へ移行させることになった。



図7 テーマ展『ミツバチのふしぎ展』（左）『アゲハのふしぎ展』（右）会場の様子

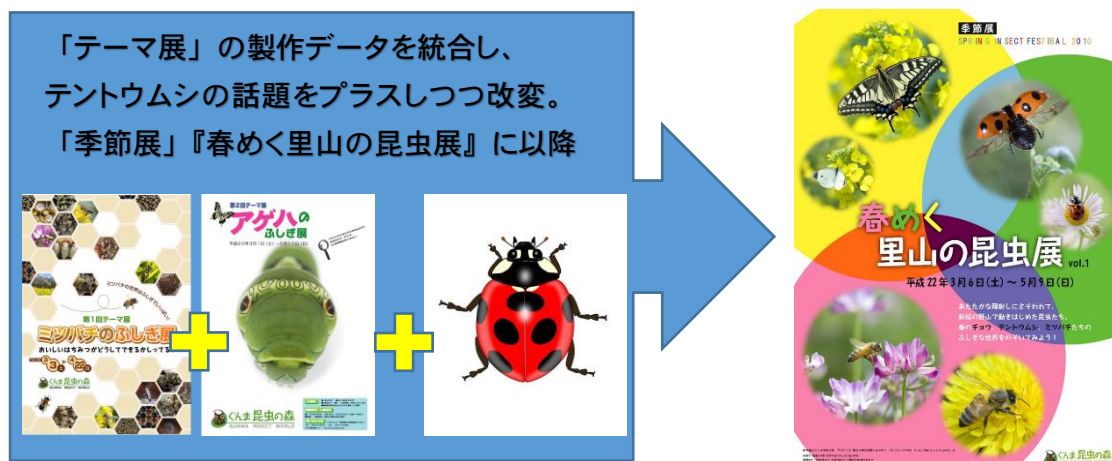


図8 「テーマ展」から「季節展」に移行した概念図

この時点で、平成 22 年度企画展『昆虫たちが生きた 4 億年』は 5 月 15 日～7 月 4 日（第 1 期）7 月 6 日～8 月 29 日（第 2 期）を長期期間行ったが、実施期間が長く、準備期間が短いという現状を考慮し、企画展は 7 月中旬開催を照準とするよう改めた。しかし、その穴埋めとして春の「季節展」開催期間を延長できないため、初夏の話題が必要と考えた。

そこで、初夏ならではの昆虫にスポットを当てた展示内容を考案し、葉を食べる昆虫、水

辺の昆虫などをメインとした構成でパネルや標本を入れ替えることで、新たな季節展タイトル『虫たちの季節がやってきた!』(平成 23 年)とし、早春編・初夏編で展示を切り替えることとした。



図9 『春めく里山の昆虫展』から、2部構成で再編した季節展『虫たちの季節がやってきた!』

4. 企画展フロー展示ローテーションの確立

これによって、夏の繁忙期に合わせた企画展を毎年新規テーマで開催しつつ、その他の期間は毎年同じタイトルとしながらも、1タイトルの開催期間を約2ヶ月で模様替えを行う展示ローテーションを平成23年度に確立し現在に至っている。

- ① 前年度3月～5月連休まで 『虫たちの季節がやってきた』 早春編
- ② 5月連休明けから7月2週目まで 『虫たちの季節がやってきた』 初夏編
- ③ 7月の2週目から8月末まで 『企画展』 毎年新規テーマで開催
- ④ 9月～10月一杯まで 『秋の野山の昆虫展』
- ⑤ 11月～12月末まで 『虫の画作品展』
- ⑥ 1月～2月一杯まで 『フォトコンテスト』及び『昆虫たちの冬越し展』

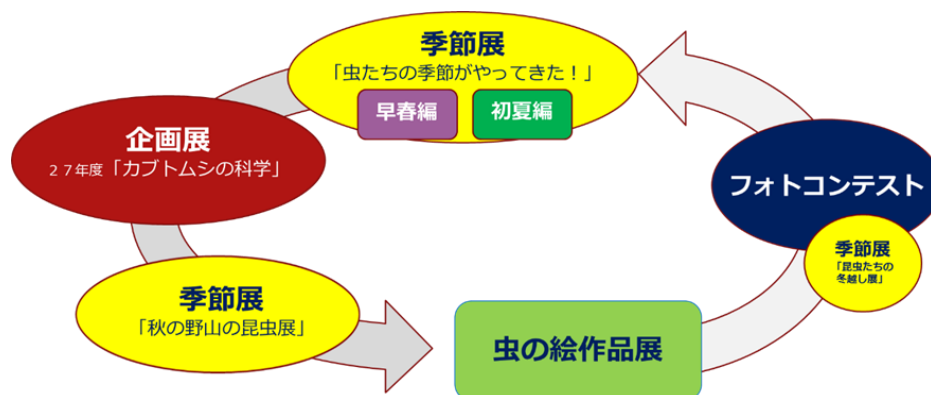


図10 企画展フローの展示ローテーション概念図

5. 企画展フロアーを支える3つの柱と展示の位置づけ

企画展

繁忙期の集客を目的とし、毎年新規テーマで製作実施を行う唯一の企画展示。

季節展

フィールドを有する施設として、季節毎の基本情報を提供し、移り変わる季節感を来園者に楽しんでいただく。展示物の出し入れで再利用しながらバージョンアップを図っている。

虫の絵作品展

フォトコンテスト

一般来園者、県内小学生の作品を主体とした参加型展示で、閑散期の集客を図る。毎年、新規で応募された作品を展示する。

6. 企画展・季節展 展示の工夫

企画展、季節展において、企画展フロアーを構成する基本アイテムについてまとめた。

(1) パネル展示

展示会場のレイアウトを構成し、解説パネルを貼り付ける上で重要なパーテーションボードは既成のものを使用している。一枚の規格がH2100 mm×W1200 mmのもので、2枚分(H2100×W2400)を解説パネル1枚分に使用している。パネルのベースは硬質ダンボールで、ここに出力紙を貼り付けるが、企画展では新しい情報を過去の出力紙に上書きすることで再利用している。『虫たちの季節がやってきた 早春編・初夏編』では両面に出力紙を貼り、展示の切り替えは裏返すことで完了できるよう省力化が図られている。



図11 硬質ダンボール製解説パネル
『虫たちの季節がやってきた初夏編』
ベースとなるパーテーションボードの
全面を隠す目的で考案したサイズである。

ダンボール製解説パネルのパーテーションボードへの取り付け手法には大変苦慮をした。当初はマジックテープを使用していたが、反り返り特性が強いためにはがれるという事態が多発した。ビス留めを検討するが、パーテーションボード内素材が柔らかいためネジが効かないことが判明した。そこで、木製ダボを打ち込み、両面からねじ穴を切った金属プレートをビス留めし、1枚の解説パネルにつき4点のボルト固定をすることで解決している。

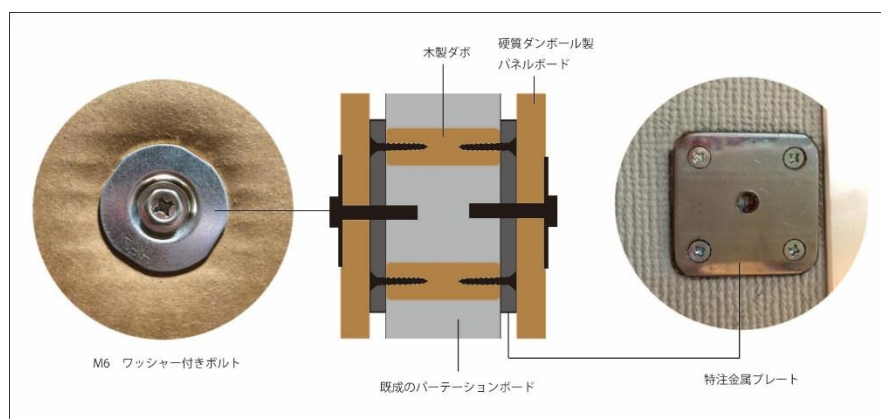


図 12 パーテーションボードへの解説パネルボード取り付け断面図

(2) 生体展示

生体展示の基本システムは、は虫類用に開発され市販されていたガラス製レプタケースを使用している。3タイプ (①W450×H600×D450 ②W450×H450×D450 ③W600×H450×D450) の規格を用意し、プラントディスプレイに併せて使い分けている。植物のコンディションを維持する目的で、照明器具はメタルハライドランプと組み合わせている。



図 13 ガラス製レプタケース 3 タイプとメタルハライドランプを組み合わせた生体展示の様子
『秋の野山の昆虫展』

小型の昆虫類では、委託製作したアクリル製ケース（W300×H450×D300）を使用する。これらの生体展示を設置する専用什器（天板サイズ W1800×D600）も委託製作したもので計 6 台ある。キャスターで移動可能な仕様となっており、企画展フロアの生体展示レイアウトで構成する重要なアイテムとなっている。



図 14 小型の昆虫類展示で使用するアクリルケース（左）と生体展示専用台となるキャスター付き什器（右）（『虫たちの季節がやってきた初夏編』 オトシブミ類の展示）

（3） 標本展示

標本展示では 2 タイプのケースを使用している。一つは既成のガラス製什器で企画展などのテーマごとに入れ替えを行いながら使用しているものが 6 台。もう一つは特注アクリルケースと専用台との組み合わせで、これについては、ベースに生息する環境写真を出力して標本を設置したもので、『虫たちの季節がやってきた 早春編・初夏編』においては、それぞれ製作済みのものを 6 台、ケースごと差し替えることで展示切り替えの省力化を図っている。



図 15 ガラス製標本展示ケース（W1490×D590×H180※ケース部分）（左）と、季節展用アクリル製標本ケース（W900×D600×H100※ケース部分）（右）

(4) 映像展示

企画展フロアーエントランスには大型液晶モニター（29 インチ）があり、それぞれのイベントに沿ったプロローグ映像を製作し放映している。会場内の解説映像は 14 インチ小型テレビとDVDビデオデッキの組み合わせで最大 6 セット用意している。これについても撮影・編集を独自に行いDVD化したものを使用している。近年、映像展示の発展はめざましく、演出効果が高い大型モニターやプロジェクターが製品化されており、今後、これらへの移行を考えている。



図 16 企画展フロアーエントランスのプロローグ用大型モニター（左）と、解説動画用 14 インチ小型テレビと DVD ビデオデッキとの組み合わせ（右）

7. 展示の切り替え作業について

展示の切り替え作業に要する時間はイベントにより若干の差があるが、平日の 5 日間以内に完了させることを厳守している。以前は開館中に行っていたが、現在はメンテナンス休園を設定して閉園時に行っている。企画展でのパネル出力紙貼り込み作業のみ委託で行うが、会場のレイアウト変更、床配線に至るまで基本的に職員が行い、『虫の絵作品展』『フォトコンテスト』においてはボランティアの協力を得ている。



図 17 平成 27 年度『秋の野山の昆虫展』から『虫の絵作品展』切り替え作業の様子

おわりに

平成 17 年開園以降、紆余曲折の中でたどり着いた展示ローテーションだが、大変な労力を掛け、頻繁に行われる展示の切り替えが、入園者数にどのように反映されているかを計る分析は難しい。数字として表せる参考値として、平成 26 年度のアンケート調査では、一般来園者のリピーター率が約 60%という結果を得ている。

魅力ある施設とは、展示やプログラムを基軸とした様々な要素の充実であると考え、少なくとも、常設展示と同等面積のフロアが 2 ヶ月スパンで模様替えされるのは当館独自の展示スタンスであり、このような常設展示の補完が、結果的にリピーター率の維持と、年間入園者約 10 万人という横這い状態でありながらも、入園者減少を食い止めることに貢献していると考え。

建設費の予算減から生じた、企画展フロア運営の変遷は、業務のウェイトに常に大きく影響してきたが、現在では、魅力ある昆虫施設の一端を担うプラスの要素としてとらえている。そして、現在のかたちが完成形ではなく、常に展示内容のバージョンアップを図りながら、今後の企画展フロアを維持していくことを考えている。



図 18 平成 27 年度 第 12 回企画展『カブトムシの科学』会場の様子